

ポルトガル語圏諸国共同体会合における東大使のスピーチ(和訳)

ムラルジポルトガル語圏諸国共同体(CPLP)事務総長、CPLP 加盟諸国大使の方々、並びに参加者の皆様、

先ず初めに私は、昨年7月の CPLP サミットで、正式に、日本の CPLP へのオブザーバー参加が認められたことについて、CPLP 事務局を初め、加盟各国の支持に対し改めて謝意を表したく存じます。日本が CPLP にオブザーバー参加することは、安倍総理が、昨年5月にポルトガルを訪問した際に表明し、CPLP 事務局、ポルトガルを始めとする加盟各国の皆様から御支持をいただいた結果、僅か2ヶ月後に認められました。

日本はポルトガル語圏諸国と長年に亘り、政治、経済及び文化等様々な面において緊密な関係を築いてきました。日本とポルトガル語圏諸国とは、民主主義、人権や法の支配といった基本的価値を共有する国際社会のパートナーです。

日本は、アジア、欧州、アフリカ、ラテンアメリカに跨がり、グローバルな影響を与えるユニークな組織である CPLP を通じ、ポルトガル語圏諸国との文化的・経済的紐帯を再確認するとともに、CPLP 諸国の発展のためにこれまで以上に協力していく決意を新たにしています。

本日は、国際社会におけるポルトガル語の重要性とオブザーバーメンバーとしてポルトガル語の促進・普及のための我が国のアクション・プランについて、詳細はお手元にお配りした資料を御参照頂くとして、ここでは要点をかい摘まんで説明させていただきます。

言うまでもなく、ポルトガル語は世界で6番目に多い2億5000万人に話されている言語であり、21世紀におけるグローバルなコミュニケーション・ツールとして重要な役割を果たしています。日本におけるポルトガル語やポルトガル語圏の文化の普及は、日本とCPLP 諸国の文化的な交流を強化するのみならず、経済、貿易、観光やあらゆる側面の協力関係の強化に有益であります。既に昨年10月にはジェットロ・ミッションとCPLP企業家

連合との会合も行われました。

ご承知のとおり、日本では大学において活発なポルトガル語教育が行われており、ポルトガル語学科を設置している主な大学には東京外国語大学、大阪大学、上智大学、神田外語大学、京都外国語大学があり、特に東京外国語大学では、100年近くに亘り、上智大学では約50年間に亘り、それぞれポルトガル語教育を行っています。これらの各大学でポルトガルやブラジルの大学と協定を締結し交換留学等を行っているほか、ポルトガル語普及に関し、ポルトガルのカモンイス院との協力を行っているところもあります。

東京外国語大学では、「国際ポルトガル語院」との関係強化に努める意向を有しており、また、本年5月末にはポルトガル語とスペイン語を軸に環太平洋諸国の歴史と現在とを多元的に扱うシンポジウムの開催を予定しています。

京都外国語大学では毎年全日本ポルトガル語弁論大会が30年以上も続けられているほか、ポルトガル及びブラジルの政府が認める「外国語としてのポルトガル語検定試験」も実施するなどポルトガル語教育に非常に力を入れています。近い将来パッソス・コエーリョ首相が訪日する際には同大学の学生との交流も期待されています。

ポルトガル語の普及に関しては、以上の大学での活動に加え、日本の著名な近現代作家の小説等がポルトガル語に翻訳され、ポルトガルやブラジルで出版されるなど、出版分野の交流も盛んです。

日本の外務省は、実際の外交活動の現場で日本とポルトガル語圏諸国との架け橋となるポルトガル語を専門とする外交官の養成にも努めており、その一環として「国際ポルトガル語院」が設立したポータル・サイトの利用も奨励しています。

更に、ポルトガル語の普及とは切り離せない、より幅広い文化交流に目を向ければ、日本各地には、日本ポルトガル協会があり、ポルトガルワイン等の食文化の紹介、ポルトガル語の書籍・映画及びファドなどの音楽の紹介等を草の根活動として行っており、今後とも活動を続けていく予定です。

同様の草の根団体として日本ブラジル中央協会もあります。約160万人に及ぶ世界最大の日系人社会が存在するブラジルとの交流については、日本国内にも日系人を中心とした約19万人のブラジル人コミュニティが存在し、ブラジルのサンバを日本国民に広く紹介する「浅草サンバ・カーニバル」のほか、日本各地で「ブラジル映画祭」も開かれています。日本とブラジルには移民史料館があり、100年以上に亘る両国間のつながりを知る機会を提供しています。

今後は、姉妹都市関係も活用しつつ、サッカー等のスポーツ交流を活性化していきたいと考えています。

冒頭述べましたとおり、日本は、以上のようなポルトガル語及び文化の促進・普及だけでなく、CPLP 加盟各国の期待に応え、CPLP 諸国と一緒に、これまで20年以上に亘って培ってきた TICAD プロセス等を通じて、アンゴラ、カーボヴェルデ、ギニアビサウ、モザンビーク及びサントメ・プリンシペを含むアフリカ諸国や日本と同じアジアにある東ティモールの発展のために積極的に貢献していきます。かつてブラジルのセラード地域が日本の協力を得て20年余りで世界有数の穀倉地帯へと変貌しましたが、この経験が今モザンビークでも活かされつつあるのはそのほんの一例であり、我が国とCPLP 諸国の協力関係は今後無限の可能性を秘めています。

最後に、CPLP 加盟諸国及び CPLP 事務局の御発展を改めて心から祈念します。

平成27年2月
駐ポルトガル日本国大使
東 博史